

## メッセージアウトライン サムエル記第一25:1～44 「ダビデとアビガイル」

[1]「サムエルは死んだ。全イスラエルは集まって、彼のために悼み悲しみ、ラマにある彼の家に葬った。ダビデは立ってパランの荒野に下って行った」

サウルに王としての油を注ぎ、また神が彼から去られた後にはダビデに油を注ぎ、預言者、士師として長い間イスラエルを導いてきたサムエルは死んだ。一つの時代が終わった感がある。しかし、イスラエルの歴史は続いていく。ダビデはサウルから逃亡中のため、サムエルの葬儀に出ることはかなわなかったであろうが、サムエル死去の知らせは伝わっていたことであろう。悲しみを胸にダビデの逃避行は続く。「パランの荒野」…シナイ半島の南部に及ぶ広大な荒野。

[2-3]「マオンに一人の人がいた。カルメルで事業をしていて、非常に裕福で、羊三千匹、やぎ千匹を持っていた。彼はカルメルで羊の毛の刈り取りをしていた。この人の名はナバルといい、妻の名はアビガイルといった。この女は賢明で姿が美しかったが、夫は頑迷で行状が悪かった。彼はカレブ人であった」

「マオン」…パランの荒野の北部。「カルメル」…マオンの北側に隣接する地。ヘブロンからは約10キロメートル南。

「ナバル」…愚か者の意。道徳的、霊的な愚かさを表す。しかし、これが本名であったとは思われない。彼は非常に裕福であったが、本名よりもこのような名で呼ばれるほど、悪名が高かったのであろう。→頑迷で行状が悪い。「アビガイル」…わが父は喜ぶの意。彼女は賢明で姿が美しかった。

「カレブ人」…かつて出エジプトの時代、指導者モーセがカナンを探らせた十二人の斥候のうち一人がユダ部族のカレブであった。彼は信仰に堅く立つ人物であり、カナン入国後はヘブロンを相続地として与えられる。→ヨシュア14:13、15:13 ナバルはその子孫であったかもしれない。

「羊の毛の刈り取り」…年に一度行い、刈り取られた羊毛は衣料の材料や交易の資源になる。この時には盛大な刈り取りの祝いをする

[4-9] (4)「ダビデは、ナバルがその羊の毛を刈っていることを荒野で聞いた」

ダビデも羊飼いだだったので、羊の毛の刈り取りの日には豊かな飲食が関係者にふるまわれることを知っていたであろう。(5-9)それでダビデは十人の若者を選んでナバルのもとへ送り、平安の挨拶を述べさせ、ナバルの羊飼いたちがカルメルの荒野にいた間は恥をかかせたこともなく、何も失うこともなかった、すなわち彼らのために私設自警団のようにして守ってやったので、この祝いの日に何か手もとにある物(食物)を与えてくださいと願った。「あなたの子ダビデ」…謙遜から出た表現。

[10-11]「ナバルはダビデの家来たちに答えて言った。『ダビデとは何者だ。エッサイ

の子とは何者だ。このごろは、主人のところから脱走する家来たちが多くなっている。私のパンと水、それに羊の毛を刈り取る者たちのために屠った肉を取って、どこから来たかも分からない者どもに、くれてやらなければならないのか。』

「ダビデとは何者だ」…ナバルが本当にダビデを知らなかったのではなく、ダビデが取るに足らない者であることを強調した表現と思われる。ナバルは他人を見下げることによって、自分が偉大な者であるとの思いにふくれ上がっていたのであろう。彼はダビデの一团は主人サウルのもとから脱走した者たちであると侮辱し、食料を与えることを拒絶した。

[12-13]「ダビデの若者たちは、もと来た道を引き返し、戻って来て、これら一部始終をダビデに報告した。ダビデは部下に『各自、自分の剣を帯びよ』と命じた。それで、みな剣を身に帯びた。ダビデも剣を帯びた。四百人ほどの者がダビデについて上って行き、二百人は荷物のところにとどまった」

使いの者たちの報告を聞いたダビデは怒り、ナバルの一族を全滅させることを決心した。ダビデと四百人の部下たちは、カルメルに向かう。

[14-17] ナバルの若者の一人が、ダビデの使いが、羊の毛の刈り取りの祝いに日に訪ねて来て食べ物を求めたこと、ナバルがそれを拒否して、侮辱して追い返したこと、ダビデたちが荒野で良くして守ってくれたこと、そしてこのままでは必ず災いがナバルの一族に及ぶことをナバルの妻アビガイルに告げた。

これらのことがナバルにではなく、妻のアビガイルに告げられたのは若者たちが言うように「ご主人はよこしまな方ですから、だれも話しかけることができません」(17)という状況があったからである。

話しかければ嘸みつくように反論され、責任を取られ、おまえが悪いからだと決めつけられ、罰せられる。……そんな状況があったのであろう。

[18-19]「アビガイルは急いでパン二百個、ぶどう酒の皮袋二つ、料理した羊五匹、炒り麦五セア、干しぶどう百房、干しいちじく二百個を取って、これをろばに乗せ、自分の若者たちに言った。『私の先を進みなさい。あなたがたについて行くから。』ただ、彼女は夫ナバルには何も告げなかった」

アビガイルは若者の報告を聞いて、事態の緊急性を察し、急遽食料を準備した。パン二百個、ぶどう酒の皮袋二つ、羊の肉五匹分、入り麦五セア、干しぶどう百房、干しいちじく二百個。一セアは7.6リットルで五セアは38リットル。これらを合わせるとかなりの量である。

彼女は若者を道案内のため先に進ませ、ダビデたちがいる場所へと進んで行く。夫ナバルに何も告げなかったのは、告げても物惜しみして、愚かな方策に走り、この緊急事態に対処できるとは思わなかったからであろう。そしてダビデに会いに行くのを止められる可能性もあった。

[20] アビガイルは山陰を下り、ダビデとその部下は彼女の方に下って来た。そこで

両者は出会った。もしアビガイルの方が何もしなかったならば、ナバルの一族はどうなっていたらろう。

[21-22]「ダビデは、こう言ったばかりであった。『荒野で、あの男のものをすべて守ってやったので、その財産は何一つ失われなかったが、それは全く無駄だった。あの男は善に代えて悪を返した。もし私が明日の朝までに、あの男に属する者のうち小童一人でも残しておくなら、神がこのダビデを幾重にも罰せられるように。』」

残念ながらここではすべてのことにおいて神に頼るダビデの姿は見られない。彼は神にかけて誓っているが、その神に導きを願うことをしていない。彼は自分で決断し、その手を血に染めようとしている。

[23-31] ここでアビガイルのダビデに対する嘆願がなされている。

(23)「アビガイルはダビデを見ると急いでろばから降り、ダビデの前で顔を伏せて地面にひれ伏した」…これは謙遜の限りを尽くした姿勢である。

(24)「彼女はダビデの足もとにひれ伏して言った。『ご主人様、あの責めは私にあります。どうか、はしためが、じかに申し上げることをお許し下さい。このはしためのことばをお聞きください。』」

「ご主人様」ということばが31節までに14回使われ、「はしため」ということばが6回使われている。いかに彼女が謙遜の限りを尽くしてダビデを説得しようとしているかが分かる。まず彼女は夫の罪を全部自分にかぶっている。

(25)そして夫の愚かさを知らせ、自分はダビデが遣わした若者たちに会っていないと弁明する。

(26~27)罪の赦しを得るための三重の訴え

①「ご主人様、今、主は生きておられます。あなたのたましいも生きておられます。主は、あなたが血を流しに行かれるのを止め、ご自分の手で復讐なされることを止められました」…自分の手を下して復讐しないように。そしてこれを止めるのは主なのだとの訴え。

②「あなたの敵、ご主人様に対して害を加えようとする者どもが、ナバルのようになりますように」…ナバルに対して与えられる神の罰が想定されている。

③「今、はしためが、ご主人様に持って参りましたこの贈り物を、ご主人様につき従う若者たちにお与えください」…贈り物として食料を差し出す。

(28~29)赦すことによる利益

① (28)「どうか、はしための背きをお赦しください」…アビガイルは夫の罪を自分のこととして告白し、赦しを求めている。

「ご主人様は主の戦いを戦っておられるのですから。あなたのうちには、一生の間、悪が見出されてはなりません」…ダビデは主の戦いを戦っており、主は確かな家(王朝)を建てられるゆえに、その一生の間にナバルを殺すという悪が見出されてはならない。

ナバルの罪を赦すことによって、29節で言われているようなことが実現する。

② (29)「人があなたを追って、いのちを狙おうとしても、ご主人様のいのちは、あなたの神、主によって、いのちの袋にしまわれています」…ダビデのいのちは主によって守られる。

③ 「あなたの敵のいのちは、主が石投げのくぼみに入れて投げつけられるでしょう」…敵は主によって敗北する。

[30-31]「理由もなく血を流したり、ご主人様自身で復讐したりされたことが、つまずきとなり、ご主人様の心の妨げとなりませんように。主がご主人様を栄えさせてくださったら、このはしためを思い出してください」

将来、主の約束が成就したときに、ダビデ自身で復讐したことが、つまずきや良心の呵責とならないように。また将来の繁栄の時には、このはしため(アビガイル)を思い出してくださるようにとの願い。

[32-34]「ダビデはアビガイルに言った。『イスラエルの神、主がほめたたえられますように。主は今日、あなたを送り、私に会わせてくださった。あなたの判断がほめたたえられるように。また、あなたが、ほめたたえられるように。あなたは今日、私が人の血を流しに行き、私自身の手で復讐しようとするのをやめさせた。イスラエルの神、主は生きておられる。主は私を引き止めて、あなたに害を加えさせなかった。もし、あなたが急いで私に会いに来なかったなら、きっと、明け方までにナバルには小童が一人も残らなかつたらう。』」

ダビデはアビガイルの行動に主の介入、主の摂理の御手を見た。ダビデがナバルの一族に手を下さなかつたのは、まさに主がアビガイルを用いて彼の復讐を止められたからであった。

[35] ダビデは彼女の願いを受け入れた。

[36-39a]「アビガイルがナバルのところに帰って来ると、ちょうどナバルは、自分の家で王の宴会のような宴会を開いていた。ナバルが上機嫌で、ひどく酔っていたので、アビガイルは明け方まで、何一つ彼に話さなかつた。朝になって、ナバルの酔いがさめたとき、妻がこれらの出来事を彼に告げると、彼は気を失って石のようになった。十日ほどたって、主はナバルを打たれ、彼は死んだ。ダビデはナバルが死んだことを聞いて言った。『主がほめたたえられますように。主は、私がナバルの手から受けた恥辱に対する私の訴えを取り上げ、このしもべが悪を行うのを引き止めてくださった。主はナバルの悪の報いをその頭上に返された。』」

「彼は気を失って石のようになった」…自分の身に迫っていた危険を知ったからか、多くの贈り物を妻によってダビデに送られてしまったからか。そして彼は十日ほど後、主に打たれて死んだ。ダビデが手を下さずとも、彼は主によってさばかれたのである。「あなたの敵、ご主人様に対して害を加えようとする者どもが、ナバルのようになりますように」(26)というアビガイルのことばがここで実現している。

[39b~43]「ダビデは人を遣わして、アビガイルに自分の妻になるよう申し入れた。ダビデのしもべたちはカルメルのアビガイルのところに来て、彼女に、『ダビデはあなたを妻として迎えるために私たちを遣わしました。』と言った。彼女はすぐに、地にひれ伏して礼をし、そして言った。『さあ、このはしためは、ご主人様のしもべたちの足を洗う女奴隷となりましょう。』アビガイルは急いで用意をして、ろばに乗り、彼女の五人の侍女たちを後に従え、ダビデの使者たちの後に従って行った。彼女はダビデの妻となった。ダビデはイズレエルの出であるアヒノアムを妻としていたので、二人ともダビデの妻となった」

「ダビデは…アビガイルに自分の妻になるように申し入れた」…この申し入れには未亡人救済という面もあったであろうが、カルメルで繁栄していたナバルの牧畜事業を引き継ぐという面もあったであろう。(未亡人ルツと結婚したボアズのように。→ルツ記4章)それによって彼は南ユダに活動拠点を確保することになる。しかし、彼はすでに荒野を逃亡中にイズレエルの出であるアヒノアムを妻としていたので、重婚となる。この後も彼は多くの妻を娶ることになるが、聖書が教えていることはあくまでも一夫一妻制である。→創世記2:24、マタイ19:5 一夫多妻は多くの問題を引き起こす。

「イズレエル」…ヘブロン南西約10キロメートルの地。

[44]「サウルはダビデの妻であった自分の娘ミカルを、ガリム出身のライシュの子パルティに与えていた」

「ガリム」…サウルの住むギブアとエルサレムの間あたりの地。サウルは自分の娘でダビデの妻となっていたミカルを勝手に離婚させ、パルティに与えていた。後にダビデは彼女も取り戻す。→Ⅱサムエル3:14~16

ダビデは今もサウルにいのちを狙われ、逃亡中であるが、主は彼を常に守り導いておられる。そして時が来れば、彼はサウルに代わってイスラエルの王とされるのである。その過程において、ダビデがナバルの忘恩に怒り、自らの手で復讐をなそうとするが、主はこの時もナバルの妻アビガイルを用いて介入された。アビガイルは自らの判断でダビデのもとに行き、執り成しをしたのであるが、そこに主の摂理のみ手があった。アビガイルが若者からの知らせを聞いても何しなかったならば、結果は全く違うものとなっていたであろう。

アビガイルの身を低くしての心からの執り成しに、ダビデは復讐の思いを取りやめたが、彼はそこに主なる神の働きを見たのである。

神の御子イエス・キリストもナバルのように愚かな罪人である私たちのために執り成し、私たちのために十字架にかかって死んでくださった。それによって私たちは救われ、神の前に義とされ、神のものとされるのである。→ローマ3:23~24

私たちも自分の意に沿わぬことや、逆境に陥り、自分の判断や決意に従って行

動しようとするとき、まず、主なる神に祈り、知恵を与えられ、みこころにかなった歩みをするのが大切である。感情に任せた自己判断で進むと後に大きな悔いを残すことになる。

そのためにも毎日、神のみことばである聖書を読み、導きを祈り求め、知恵を与えられ、一日を始めることは大切である。→詩篇1:1~3、23篇、箴言3:5~7